

「父よ、彼らをお赦してください」

2014年4月18日

今日の4月18日（金）は主イエスが激痛と苦悩の末、息を引き取られた「受苦日」また「聖金曜日」と言われる日である。当時の社会は、エルサレム神殿を中心とした宗教家たちによる神の名による「差別管理社会」であった。この社会で、主イエスは差別、抑圧されて苦しむ民衆に、生きることの尊厳を生き生きと現された。民衆は喜び、慕って群がった。しかし神殿当局は、体制を破壊する危険人物として、追い詰め、ようやく神への「冒瀆罪」を宣告することができた。冒瀆罪は「石打ち」の刑で死刑にすることができるが、主イエスは民衆から支持されているので、自らの手で処刑することを避けた。ローマへの反逆者という政治的罪状にすり替えて、ローマの総督・ピラトに訴えた。ピラトは罪状を認められず、ムチ打った後、放免しようとした。しかし、歓迎、支持していた民衆も、侮辱されムチ打たれた無力な主イエスに失望し「十字架につけよ」と叫んだ。ピラトは要求を受け入れ、ローマへの反逆者として「十字架刑」を宣告、執行する。ここには、神殿当局の体制維持の思惑、民衆の状況に流される付和雷同、ピラトの信念を通せない優柔不断の罪が重なっている。更に、死んでも従いますと言った弟子たちからも見放された。

主イエスは深い孤独と理不尽な仕打ちの中で、十字架の上で苦しみ抜く。その時、ルカによる福音書は「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈ったと記している。

私は初めて聖書を読んだ時、この言葉に衝撃を受けた。この言葉から、主イエスに対する関心と興味が湧き出た。自分を理由なく殺す者のために、苦しみの極致で、このような赦しを祈ることができようか。この人は、一体誰なのかという問いが求道になった。

後になって、この言葉は福音書の著者・ルカが、主イエスの口に載せた言葉であることを知った。新共同訳聖書では、[]がついている。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」はルカの主イエス理解である。

福音書と同じ著者・ルカが書いた使徒言行録7章にステファノの殉教が記されている。エルサレム神殿の最高法院での説教を「冒瀆罪」とみなした人々は激怒し、石打ちの刑で命を奪った。この時、ステファノは「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と祈って、眠りについた。主イエスとステファノの祈りは同質である。ルカは、ステファノは主イエスの十字架の祈りにならったと描いている。二人の死に際しての祈りは、ルカの主イエスへの信仰である。ルカは、主イエスの十字架の死を「赦し」と捉えた。

私は自分を神殿当局、民衆、ピラト、そして弟子たちの一人として、主イエスの「赦し」の中に置かれていると信じた。それが、私の信仰である。この信仰は飛躍があり、幻想とも言えよう。しかし、何をすべきか分からず、生きることに絶望していた私に、そのままよしと、赦してくださる福音そのものであった。

私は、この福音を語り続けてきた。それ以外、語るべきものがなかった。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈られた主イエスが、私の救い主・キリストである。